扶桑拾葉集 九

雜部第三

和書
一〇四六〇號

和書門
類 一〇四六〇號
函 一一六
架 四
冊 三五

内閣文庫
和書
一〇四六〇號
三五冊
一〇四函
七架

内閣文庫
番號 和 10460
冊數 35 (11)
函號 204 144

国立公文書館
National Archives of Japan

扶桑拾葉集卷第九

目録

古東風社抄席

同淡席

正治奏状

沖叢濱川訣合席

立社百首席

日吉七社訣合席

同波

同同同同同同

菊原俊成

紫香藏

政府文書

巻九目

すみの詠合歌　同
民部卿家歌合歌　同
家乃集の内　右京大夫
安元御賀乃記　藤原隆房
艶詞　同

宮内庁書陵部

拾葉集巻第九

参議従三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀編集

序

藤原俊成

やまとうたのそもそもはかみよのことなるをいにしへのよのかぜにしたがひてかはりにけるすがたもかずかずにしるしとどめてかのかみよのことのはのさかえをうるとのつかへにかよひてかのかみよのことのはのさかえをいまのよにうちそかのこれをもてあそぶこころのなかにも

とうんてんぞ　ものうらまつかぜを
あきとこなんとなれば　ふかくはとやかうら
ゝもとゝてさ　このいつくしまの　ゆくすえをみかやとそ
とゝてうねうす　氏のうらんをあらはす
うゝあてとはらこ　ゆくすえをいのれとてむしも
いつくしまの　ゆくすえをいのれとてむしも
いつくしまの　ゆくすえをいのれとてむしも
うさかしきこゝろ　とあらしをそうらの
ゝ　おくゆかしきかな　ゆくすえをいのれとてむしも
ゝのやうにおぼ　ゆくすえをいのれとてむしも
あの平のとうさ　よりよしの門ゝ

ゝ　ゝいれかとらい　ゝのあしの
あしとらいつまに　ゝたうをいつくしの
なうくいつくしの　ゝたのしかくしき百人
とゝすれ　ゝ　ゝかの天台
止観　ゝ　ゝの幻は止観の門
なうこゝ　ゝ　ゝいまきすと　章安大師
とゝ　ゝ　ゝ　ゝ百　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

しなり、年ノ内ニ入れ事といそんとて、たゞ条
大納言公任卿、ごうぼうの集ニ、
通俊卿ノ後拾遺の序ニ、
のことくに、くゝみ、ものを、ぬし、おとし、ぬら
さしとゝ、ものきぬひとの、ちくゝ、
ゆきとゝ、たゞ、ものみ、あるゝ、
としのみ、ふるく、艶ニ、あれ、
きゝゆかしのあるかな、
和ニ、ものゝ、ふりぬ、ものゝ、
きこゆ、ものゝ、ものゝ、
いそ、ノ内、ものゝ、

もはゝ、きゝ、ゆ、ものゝ、
はゝ、ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、
ものゝ、ものゝ、

[illegible]
[illegible]
なり世にありける人〻を称いはんとてもむ
事うるはしくかんをえらばれたるかとこのみち
とおぼくさだめしめしたるをもうんて
ゆくえんなれば[illegible]
つくることとうひとしたるものへむことはさうなを
[illegible]
古今集後撰拾遺しを後拾遺ちこのさ
[illegible]
[illegible]

代この撰集はしるしてとかくとかくとかく
[illegible]
まれなりそれはとうて何のことさて後
まれなりそれはとうて何のことさて後
はなはだしくなりたる事なりなれはとく
しのあるあのふとれをあらはしたきを
[illegible]
[illegible]
[illegible]

そいとをすすめえたれとんとをえ
ゑまこかをのりをしてをいさいつ
のそはさゑくにくれはうんかのこのち
りゆをそうつそとゑうやそそをゆて
のあそをくをやをりのをのちり
うせそんかとをのはくあそをとを
ゑそをくをこのみちをんをいん
人ををちはしの美ちを別れのちみ
れこのををくをれをさ義をりて法ゑ
如盡をくをさをり往生極樂のうんをむ
をを善賢の願海をいつをそ称南のをを

とんして佛をとかくをうりをとをて
あをゆゑくを十方の佛をに往給しかつい
樂樂の元生を引導せんをそり達久と
きをゆゑ年のやを別うん月のをのを紙
うをゑくをのいりをゆをすををそを
のをををあをゆをけきにけををする
をみをりあれいのをのあをい
をををれをくををりぬゑもんこの
集ををいりをりこのをのをみをを
物をゑはををいこををり

同後序

同

やまの月のあらはれぬるかたをみるにはなを
ゝみて秋のすゑをしるしるべきなりけり
かゝとされてくるとんるゝにはやゆへさそはれな
つとをまつるゝ色雪のうちにさいてゝる
のさらぬさをしかはしはつかねのむしをなくい
こゝろくるゝとしをしれとゝぬとゝ袖
もとうはるかかつるゝ分うしむらすをと
それのさゝりにたりあきをのゝ山のさ
ゝるものゝまつる雪にやまをいて雪ぬれ
それのゝうちをゝるゝ雪のかゝるゝとゝろし

とゝひゝゝをゝまゆくゝゝにゝ分て
のゝゝにかゝるゝきゝのゝうちなみ
はゆふ色のゝゝをいゝをゝ月のゝかをゆゝをゝ
かゝるゝをゝ分ゝむゝらすをいゝゝ
さゝのゝゝゝ

ちりぬるよりとなりぬるはいとあはれなり
やうなるをはいとあはれなり
とさ月のつごもりのころ
なりぬるのちはいとあはれなり
のはつこしにそなへたるかしはのまへにうゑ
たりけるをみるにいとあはれなり
をりはやえのうちにかくれたるあやめ
ちりぬるとあるにそへたるなり
なりぬるのちはいとあはれなり
くらべうまのこまくらにそへたる
なりぬるのちはいとあはれなり

なりぬるのちはいとあはれなり
りぬるのちはいとあはれなり
ちりぬるのちはいとあはれなり
ぬるのちはいとあはれなり
ぬるのちはいとあはれなり
しるくれぬるのちはいとあはれなり
ぬるのちはいとあはれなり
ゆくさきはいとあはれなり
なりぬるのちはいとあはれなり
ちりぬるのちはいとあはれなり

たとえなりつらしとはいろのなりきてもあ
くまにぐしのさらねまゆみのもちなとは
さらのくまてこそいろまさりすかくの
みちをそなれさはねくまてそちくてこはえ
あくれりるつらしをみるこそをりなわ
ゆくまにをあしのうれたに霜とをはい
みさいのこをりとをりそちこのまゆこそ雪ぬう
をありあまいつくりもしく花とうこれ
はみのみちのまれたうはをを雪をとをそう
えのこをたくるたはもをしも袖のこをを
も身にしをはををんををををををををゆを

まをのををををををををををををををこ
をををれをはをををををををををををを
しをを優ををををををををををををを
ををはをををををををををををををを
ををなり

正治養状

同

萬葉集 聖武天皇御時 殺撰之 堀河院御時 宗徒院百首 所時皆歳三十

歌者、俊頼、基俊、五十の齢、まさぬまの御ハ、六十
りりの伝ハ三人ハ名所歌の人ハ
入度公任右大臣伝のよりひしてをを所死
入道伝数多伝北人よりしかをを又三十九

給りて、初めの中てまかりいてしき。
その初めの所衆の外十三人、公行公任行宗
教長頼輔等卿、忠盛親隆等朝臣、備前寛
雅光入道、女房堀川左衛門、小大進、こと
所のしき、其後、こと所、こと所、こと所、
公行行宗寛雅三人まかりまかりしし後
かりまたくりまたくりまたくり十三人、隆季清輔實清
と、ゆゆしき尚歌會とやすまとうて、再光
あるものりまいはまとうて、百首ありしを
いはゆるにいはまゆ、おりまとやりしの私
のうたまきに、拾遺古今とをつもりて、集撰さ

るまゆしき、其時、清輔かれはつまりらのと
てかりまりまとひりてりまとりて、仕の
りし、海ふこりまりこさまりまりこ、えいてり
りまとりくりまりまりまりて、春の私のりりり
歌を、友の外ふ、ふりしきりの、ふの源氏の
物語て、二月の花の宴の、内侍のこと、
ふりの月私りまりいこりまりを、教長、清輔
も源氏をえりりす、りて、文集りりりを
りみりりて、白楽天、不内、不晴、朧、内、朧
朧、寒、霞、抗、りり、詩、此、可、ふも、後、てりをえ
加りりく、友の私のりりりりりりりりりりて

一、教長卿捕大内ゟ被仰付候ハ、又頼
捕御詞花集撰ハ、めも頼捕ハ、ねみやとか
月ゟ被仰付候ハ、ゟ被仰付候ハ、
可申と被仰付候ハ、詞花集ハ
撰ハ、ゟ被仰付候ハ、八條ハ
ゟ被仰付候ハ、ゟ被仰付候ハ、
撰ハ、ゟ被仰付候ハ、
撰ハ、ゟ被仰付候ハ、
撰

してまた又四位入道うみやのうまうと
号外祖とてあるもとゝ入道うまうまて
えいさうさんいうみやしかるなんし
まうたうかさくしたんうくいさきさ
しとやうかしかし先祖所ゝ左大納言入
飾やくいくそをいかいかさしかし宗旨の人
人うけれさいにしかしかしきてすきは
くしやうさうさいもうん

山内上総介頼合序

同

豊芦原の国はうひやうてがふとけの

舞い人のかとやうさうる中そうとうさう
きれい是とよりはこうさうの人いうるかへし
ちうのまうしようはいうるとはひあ
しといひれとをとくひくさいまを
を人もしはあかかりなりのなり
其後いわくふよりのみやとは時
えうひとれるる美業集いせをはうり
人のかを及うをいたくくと
をれうこのうく紀要元河内郡恒
ホうえうひかる古今集ういう帝の
かうくいたくへうをとうるを

き集のうち此ことばにてうたひ舞ひ
うたは如し多くしかうの花の
ゆひ殖きはよしへうたひいはさ
人のようきうはきうはきうはきうはく
更の夢のうけふやすあはことと
といてうこれうはしんとあり撰集い
さうくはこ奇のすきとこそ。その中に
ようてようきとこいうこうはるる
一二。此時のうち四條大納言公任卿
くうの中のうちとみうきくあはうはう
きり立ちひの中と会はいこうわ

きり六の中人はいうこうはしか
の歌とうさかうきうはうはうはう
古今集のうち此中とはうとはうとの和
りはけはるとはうとうとの和
うはうはこうはしはんもひとは
きは角うはとはこんきはの中は夜ちは
いうはのうの人は中はうはいはい
うんりはけはくさうはうはうはう
りをはうはうはりの柿奇合やはう
うのは上はうはうはうはうはうはう
人はうはうはうはうはうはの沖門の沖時

ちうこうをもとれうこうとなる時い
ぶつもけをはきれあるものい信仰と
いのをもつ利のことくちうこうをあ
村上代渉時天徳寺今もと利の元
祭い書ちうこう後永義義屋の
寺今をしてのの家よりはの
ちて、ひらはをしてあるい
ちうこうあるい佛寺よりをく結縁と稱し
あるい霊社ちうをて神威ぶのうを
はしいをしをしい利をうけしをうを其い
今の恩をちうをいるあるのをく

ちうこう逆ぶはひりなをあのり
まをて、播磨とをこをうを事ををを教
をなりをんはをくこの事ををを
ぬり、且いこのみちのえ異のをうけふ
を見ぶををんこ其紙をちをしい
をいをんやすみよ明神をちを
めをりて、ぶしををるいをんを事を
のををれいをくをやしのをのを
わを次をひをくをちををのをを
後を朝をみをる事ををいわをれを
ぶを席をいををふを、曉のはをを

いとまなき事なれば、おきき時なん後ち
今此世の諸侯、みな事なる事きく事、一色
四つの事なり、よりて、遊さ事
よりこれをおうくはば事繁多なりと
みえれども、上人間位壮年此むし
まったひとりよのれとも事なる
よりて、二世のちうとむすひとう
めさ、右をもつのもとみて後ちの離居い心
りと語うとは、はいめとも、青此方奥を
且言うまとなく事なり、甚こと
これいよの事合の義なりいわうこなよう。

ちかくし先ちのとうとうきとはきと
承うまりまして例の物ちの僻事
もとしふしに、さうさてとやう
の事此をみて、いかりしかしはは
きれなることをもこそ、そんむ
天兼出兼のころはひまりのさの
此通りあり、そひてはは時いとてや
のこの花のこうはは、ちの時を
くり年の月此前みなれし事、今
をみるひとりの夢ようのこなりあるせう
人のこをもわれ業門なせすく人と

ゆうかなうつ今ましまさ世ましまかうつ
てとやうしれまさろこれをこれけを
作るしけをてもしも作のまさ露し
けく蕪のたりしをしりりくこてて
作ると明るりくけれそれるこれ
聚るるこうけまを明これ神風の
けてしに市蓑濯河の河むこれ
けしをちり作いに大内人れ中をを
めつこ蓑れあつれたをけを作んや

立往百首序

同

年ころ人れ歌合とよい神社
伊国をを事とせけり平合して
ゆるるゆまけれ判とうをむしりこうう
ておりくおよしおかのみこうく
作るるれ角くおりてちひこう
ようとして寺をるまて侯ちうき新を
のみこうはりこの事れこうう
春日日吉れ往歌合とてまれ
ちんこくくくを先作これ上を
紀をちをおりくくくあいるうう作
れなくてとくられこうれ今いど

をうらうらとかすみわたりて、
うぐひすのこゑ、
のどかにきこゆ。
ひるまでまつれども、
ひるまでまつれども、
ひるまでまつれども、

今二百首式和歌と百首ばかりをあつめ
しるの変度の比前下ものく十五番にて
まとめ事あるとうてはさのとり面さり
成さうしまうへさきしかのとれ事は出ハ
んとにすび玄旦ハ結縁のあと是とたのて
いるひ事さいかさうくもるあ雲ひまてのこ
をあるとあへしまさうりりせいどてり
おれ謂得来説謂説のつさとくるりぬ
白くれい神るとひ結縁といひのまるさ
にるさく嚴伯のけらてれとひ蓬生北尾と
おするとくとるいつうしさ初り

ませてさうしへりさうあ一れい和光同塵
のわりれしてしておをかりゆうれんこ
とるしこみくもりといるりまる

同歌

同

るれ歌北みちやにい和ふりはるりとてう
たりいてう伯とうつい神鹿をおをあうよ
つておねさねくりの面へくはるりたる歌い
かるぬしをおうさふりといひことれこし
りれいひうをせとせられとりとり縁
歌といひてうとあまれをもう縁う

まとなりてうくえんまを出立しとぎこゆる
ものさうの色しよりさいうふるものをいそ
ぎすくれやうに意氣ひぐやうるものの
やうくまいまつの花のやうるものの
社の月のまふまをとめ神とをもて
うの風ものひ岸のおもをなのをとをく
すうやうるものうしてまへうるいさうに
やうにいはまとをれ月やあやめをやひうしれと
いひむとふるれをうくふにうるいはし
ものをくうくこをはうるうやうるもうること
ものをりまふすんをもうる秋いうくをふいをうる

をうるうとはうくはうくしまうをみえはば
はう百首をうついはうう合をうをはとをあう
はうをうをとをみをはをすくはは道いうをうく
いうくをうはうのをもはくをうるをすはふ
もをうをうをうをうはうつくをのをれ聖う
ものをうすくを詠れうをも大行文殊のをうん
聖をうをはうをはうるをを文殊うはを聖はをは
みをうをはうはれをれ社壇とををうへくをはう
まをいこのは秋合をいはををいうをうをうく
あをうはは細文はるをんををん薬無高来喜見
はををえうをはうけをはををうこををうん

ちそうして侍り

うちうちにてうまうまとゆうとれ

沙汰の用れ申ことの次

ちこう歌会の跡　　同

仲和歌のうちにてちひろうちうちして。

ぜのそこそこそこ美濃の後そうそう

してうれそそとうたいうんや塩路う

たひくにこのひちくなる人れんるれい。

ゆうのうあふひくんひうちむうとうの

ちうちうちむうの仲代いせまかいと面

なむ心をれとなんいわうふいけうの

ふひ。ふうふいうふ。ふ。れ

ちうきうれうしんうとうるむけ

けうんだのそくふをそそとそ仲ふ

ふちうのうけうとうほのやまれと

うちくうちけのうちのうとのひうさいの

みちのちくゆうむこれなけうれりうわう

にかれていたとゆうれ仲ふれかうれて

い通とこのひうちたんうけうき初の

いたそうちけうんれうふませてみゆうふと

ちうけうちいけうとなむうれ夜のうとく

神のことはりのおもひをほれかの

武部卿家歌合跋

同

ちはやぶるかみよの道のとをしば
のふるきのことのはをとはんと
ぬかなんいしもものこそわすれし
らぬかたもとやいまは君をとやこ
ひむの年はすぎにしひてのうつ
ろいゆくふるのうとさ
ものやうの秋のみやしろの事ぞと
ものひとのふるとてはじめとなる

てふまきくにのまことのかきさか
つきのうつしの未得謂得未得謂得の
世俗の世とうるふるのこのよ
なるうつてゆくすゑのとう
いまのいにしへくらのこ
してやすとみてはみちのくなる
つとぶちはとへはひしひてとうの
うちぶしこそもるをうをとまま
ふるの老のなみそちのうへの
もかとまへふるのこのはと
ふるくしてどうのこのこ

ちすぎたるにわらはもいまは中の
をのまきにすみはたるをはかみは通はせて
あまひはやうきわるとていつの頃
とうちわまきのくにはすくなくなるに
ひの年はむしろとはめられる事あり
とまりしるとちる神をひとよんさ
つくりいさひさのいろゆへもあり
ちやむさはまうなふもまりろ
きしりといすれこういなひきた
花なるねしはもまんをなる事
とちりわりちあしはは

ろ年をうるすしし絵とうちのを
のいろくつよはすはたうばもはい
さはくんのこねくきろみちをえを
くはよのをむよはのうる事あり
うてはもはむうちをなたうにえんは
むうしくをきはゆををはめるうへし
すをへは在中将業平朋臣の月やうぬし
ひ紀氏は貫公はをりくふはにうる公の井の
れはいうやはにはむ一一光は五はま
ををうをふちうて事業は寿をき
えん事はうすはまはりへをもわれは

きこのうひうにをやとおものをくつの
なくなりて・ものうこたのえれうす事とも
れしとをのうへし・方角ふうきとよはう
ぶたもれすも人しうはと事よいわすまこと
むへさとをしわしたれも事はうんふ
いわうをうもやれ事はくいうしう
のう事とをいふなうきを必とのく
めらとんえこはうむわうとんくも通はを
らん人いわうひわんんあうしをしう
どうもわうこす事やとくくをのひしろ
まをかけまもの可こを位古はは作もて

らしのうみたひ・通とゆうう人磨の
御のなをたもかもひまうまをれはなは
通とうひをこはわう事とををうう
ものやをれくもやうれ事のんいいて
はしなたうのこのをきをわをう
をれいをかをは用のくをとふしをけ
のうらかむをのをのとをれうをを思ひて
むのしくはうすをといまひ事のはは
ふうう事をもわうをうをうう
をしはくをかをれとを跡のををを
わをれいををよわうをれん

乳母集の由

右京大夫

ことゆえ、元暦の頃、世のさわがしき夢うつつのごとくにて、
しらずがほなるものどもの、いつくしきまでもてなしたるに、
ふるきものどもの、ゆかりあるものどもの、ことに思ひたれば、
をぢ、をばらにして、このごろ、今はてはみかはの
乳人、めのとわらはなどもとりあつめ、姫君の御
かしづきにて、思ひてしかば、なほ、なほ、
ものさびしかりしかば、かくいひしかばにや、
ちりぬるものどもの、筆ごとのみぞ、
かくし置くべき人はなかりしかば、
世さまざまにかはりゆくうつつ、
しらずがほなるものどもの、
ひとりあるものどもの、
ますますなりゆくなかに、
あるべきにもあらぬ命をのこり、
ものごとにふれて、物いひなどせし、
わかくしもあるものどもの、
さきだちぬるものどもの、
命しあるものどもの、
さびしがりてつどひてんやう、
らんかとおもひつづけてあるに、

しどうしかとうつくしうわかしたりしうわる情日
みちのくにのくにとかなるに須賀川やまとのくに命
そうしいにはこうしなるあるうしてそうくに海
いとをむうしのかみといはるるとしたりしたること
ひくうんあるこうしゆへらるゆあるこれらるゆに
のうおおそのくにのくにまなるに思ふゆらるいに思
ほうしもそうまもうしのようにさしいうれまへし
こしかるうしおわし祢ましおうしいとて
くにのうしぐそしもわしいしくくかすとる
しいけこのうしうしあしもそうしと思ふらるうる
とるはさうしそうしてきそぬるまおおほうして

うしけそこいにはうしるうるかるかと思ふ
うるわうとかうしるそれいかのしうるわうるん
いとはかはしとこひしまかしまかるこうる
しもるんうるいうるんそうるかるうるかいる
のかるもるうりと仕月秋のうし失り
うるの蔭のうちのゆるをまこいうら何はういる
こうんさひうるうるあるこのあるこしとこいる
うるるくるるるれうるくくるるのの
交いるれういるんとおほうしうるくくうしい
うるれ須はくくとはうしるるるるむ祢うを
あるれ須はるるむうるるるるるるるるる

ほうのまゑのしざしとゝ命ハ深りあるかこ
よあるほさ国のつゝまゝすゆゝしまれ白ふ
やうりんよりもせて公とりとゝつる公ゝと
くゝをゝまにはくゝ行所前遠くんくく
三ア

又そのしるゝくゝいたゝねゞしとを
たくゝもはくゝ行るまをゝまゝまし
いくんかゝうしたゝんゝ状ゆくゝ世ゆくを
しゝたゝまゝてゝるゝくゝ京ゝとゝん
月乃ゝあゝしゝ来ゝゝ乃ゝゝしゝゝ乃ゝゝとゝま
ひゝう場乃ゝとゝにゝれゝしゝとゝる失はゝ

ゆゝ法ゝゝゝ張乃ゝゝゝゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝん
こ乃ゝこかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いけこゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
こゝゝゝ乃月よ神ゝゝゝゝゝゝん
来乃ゝゝゝ日ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝうゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ

はるくむるくやけるよ風うん
おもをなしたりのねうしくるくるる
あるこまくるをいうれくますといけまうむと
やしくんうくまくれくるゆるうれ
ふくまくのまけしまくまくれ
しくをあくはすくいくとねはくくしくる
のくくあくくをくくはくくくくくくくやうて
さめくのくくくくくくく

まいりあひたてまつりむめりしかばなほ
かりそめのやどりにあるやうにはあれど
はなをもて社をゆゑゆゑしくかざりて
つねのやしろにはことなるものとして
ゐるにはなほ乃ちそのやしろのあり
ましてやうなるものにてものしたまふ
やうにはなほゆゑゆゑしくもてなしたる人か
くてがてらいとうつくしうあり
社のまへにはそのかたのかたちの
しもとをうゑたるをとりてかざりて
ゐるにはなほ乃ちうちつけ
はしたなかりけんかとおもふ

あれもてなしたるのち
そのかたちのあさましくおそろしくなん
しまうてらくんくむまりて
あるうちにあるにてあるをすくはんと
ゐんかとしくいくんかなるまうしたる
ものそのいとしをるかり
ものの

あさましかりけるうちにもゆゑ
ゆゑしのあるんとをみかいを
もちけるのちにあるまりて
えこんにもしこまりしこうとにく昔

ちうこうにしあさゆきのあそんくに
うしはまとひこのすくねふまひとのあそん
ていかんこにんもてあひてをくをうこ
かうしというあうこをむくひきとんうし
ふくはくにんのはかいかくておとあてれ
せをこうのかくくうれしさうんうふし
あさゆきえんすまくこのむし
かうあしこはおとしてしえに
逆こうちうのうちをとくこうれをう
まるこれせひのはせのうちよりをとうへて
をんらうあひをくはらん

まるこれりをのこ佐の中將こ国のをまれ
をををくこうにのあくれうこ
国のせをえくこうをしこ
をくをにをくれをあし
をくをにをあるををくこに
をうくをうしかををにこ
いはをうをうをくををくをこ
しをくをいをりくををくをこ
しをうをうをうををををこ
をくをくのをりをくをこ
をををくををををををこ
のをのをををををををこ

うしろのすりのもとにいとまもなくおみ
れ侍りしかばいつしかおぼしたてまつるに
おぼしおれてこゝにたゞ人にはあらぬ
をとはわといてゝうつくしうかなしう
をしかりしかばいとゝかなしうとりこめ
たてまつりてこゝにしてもしかな
むとおもひたまへしかどもかの
ものゝたまへるさまをみるに
らんとおもひたまへしかどもかの
ものゝたまへるさまをみるに
ゆゝしうおそろしきものつよう
さるものにこの三位中将と

きよつねの中わとゝいふくせものあるをこの
人のいとあつかひたまへるをいとゝ
やうゝなかいゆんをのとさはこの
ひしすゝてやまるこのとうねくい
まりをてこの家にもまるほどをこの
くのあるをりのちをもはなをとゝ
やうてはこのをとこをもとをあはし
さはしてこの世をとこの有しかを
しのちをもをもとをはわをとをもうれ
をくこのはをもとをいつるをはやをこの
をのをちををえいつるやをれねをこのゆ

つまのくさいかくのこゝろをみるまでしたしきあ
るべきものとおもひてそこにつゝみまゐらせ
たるをかくもまことしとおもひ
たるいとをかしさこゝにたゝんとしてはいとさ
うにあつむ袖にうちたれて
おれはとてはかなきものもれ
あくるはるをあはこのとも
此くるかそちよりもいとをかしき
思ひてとをちらしやうてそれもいとく
おもしろくいとうれしき

なとよりもしあまきこゝろはいとうれしき
しいとくこゝにいそ分けともきこえあひの
まをしてをくおもしらあるいちまく
なんまをのやうに此きこゝろをそなたを
やう事
思ひもかけぬこゝろうれしうて
さはうよ思ひとうおはうる
今いとくるの情もあるれを
えしとをしもせしとふこゝ
さしたちあるくれまをいとの事
あるはうふもあるこゝをと

かくうにまとうろうりうう
こあつうとうしらましてまるいつか
ゐるしまるのうしのうあそゐうとに世世み
かてうきうこてうそのほうみまいまう
ゑゐるのうこういうんみうゐくゐしまう
ゐいとそうはまうてうとうゐかはなうは
うんやうわるうこうりいうんくうてう
いうまうんいゐうるうんゐるうのうち
ゐうしうきうてうしうりうこうて初くう
ゑのうこうんのうまうんうをうにうこうあう
とわうをんうとゐうんやうくにおうう

ゐようをんうとのうこうりうきうこうりうゐ
とせゐくうりうしまいうりうこうかゐう
ゐうこうかうこうあうゐうのうりうてうるわく
ゐうきうこうまうとうをうにうをうりうこうまいう
ゐうりうゐいゐうにうをうりうゐうゐうんうゐ
れうりうゑ

ゐうくせゐうるうにうをうりうゐうこは
ゐゐゐうんゐんやういうゐん
ほうてうんうのうをうりうこうゐうこれ
いうくうをうりうこうゐうこうゐうれ
うりうこはゐうりうゑ

かるしうとあるしたちよりのけ
ふよりこと
ひとつとあめ
ひくもさいるうしつるせのもしらくく
あもわくしねとたいさしひうはしいし
きしつとゆしひこうくしるまるかれ
しさしるしはまうちとうれくひつし
なりとかうせりのはとやうみしるのす
りいあるしはれるしゆうるのゆるうくいうる
もとわもとしたおはくしれるしとうひう
あいるあしるのをおはのむしもいはし
そのうるうかうあるわれしあ連

かうしはまいけりうはあうこのをはるとうう
まりてそうこうさしたのおりあしかりまま
りこしとしかるさいうそくいはもんとのを
こくとうれるわもうれうう
そをうしるくかあしはよあいこまる
あうけいうりはまるようし
ほうていはるうしはとるけうして
もりもしれしするうるうれ
ほんと思いてもまるそうこうの
ふうあるうんとそうるのき
そむれはまはいはるはのりをする

もるにのりをしそとうれ
らに思ひやまと、ひしめ
くしあをくしうとまあまるものの
うのこうとく。あとうこんもきけるあう
先とよりあのゆりあめんもせにくろて。
行ゆしみちひろうとうとみて。
のうとに思ひおされて。かれうれいせん
れうし命はく方物出して。まうしに
とうせて。位うう又うれうゆうくし
のをゆうう面うあれいぶにりのうかう
命をつて地蔵ひたいまうとかまうれまう

せなと。面くうろけうとうねも
又人のはうもうれいぶとうこんうとせ
源ひ家とり日いとうむうれうしうなれ
を先うれうし。

とうとうかうとうひそのそうのうとう
かうとうけむりのみちとうこう
なうとうう思ひ物んうしあ。あうとうこんの
御りうこんりをてくやうせう物ちうさけう
けうりひこうとうけうくうれいおけくてうむ
せうそうひこうひくうひいぶせうともあかくう
とうなうとうう。あうくうとうとうひこん

みゆきゆくのあるじのこのくにのかみにそなへ
昔のあるいにしへのうたのこころをもとめて
ちからをそへたてまつるものなり
あつまのくにのかみにはたらきとのあ
しらしめるようとてゆきかうをやりて
見ゆきいたるものこれをやりたま
うしむるしたるもうしろめたくおもひ
うめりしあることとおもひて
ちからをそへたてまつるものなり
かれさいはいとりよはとを水ちから乃
あるいなりくうえねうそ見よ

かくの乃日ひよをへ手てれもわく
るひるるるむ乃をそうし
ゆ乃ゆうゆうてゆめよいるゆるゆ乃やうをい
そをに乃うゆもしてゆ見おろしいれ行の家に
ようれ日てようれ社ゆやうて手ゆ日てに
つちうへ乃ゆをくうゆゆうのゆれてゆゆ
社いゆやとゆるかゆうかうをうをうて日てし
いをけう物てしかゆしゆ日しれゆるれるれて
れしどうをうを社し手
こちをむうれゆやりのとれゆるん
りゆうしいをうを乃日をし

ゐくさむすとうにまくにたゝはよのとむらん
そをくまつるとゝろのはさをくもりとものこと
えつかとゝろに月みもいしるとものこゝろく
又かくるめしうるに物をはつとゝいうるゆへ
そと詠も仏をうしなくんなりとゝ
ほりとうとそのむ仏もめくまぬと
のちまいせまそとはつれさ
物語をかりに月もはいるうんん
あとうむつうにいせるれも
小仏のあんまようあるかぬあるとしとる
をくはうしんのうとゝろそ

のさうとゝ秋の野をたてえまいつれてりかしん
しゐそれもえしわも有しとあるらし
さのとゝてなりてとまきしとゆりとある
ひとゝうはせをくぬすもあらしてうう
命えれ面りけをはらしてまるかも
くうくうを面りつかるれはく
ろうれ逢をはうちうくくようをうを面
りなりてむくくしをはけをををりあり
しをれををあるれまゝ色くこをに
ををりあはてをうをれえのよはりみれ
ゝをうをはちうはゝ一むを

きしの岡とんむしの花とも野ゐとえ
ゑしまとろの岡とん柳ておのしたもとの
りしにそとおとりとるむるにさ岡くおりい
出るとてをいつしてくるうれいりもれを
おほしねやるよかうみるんりらるて
ゑうえてい野そさなりそて
あるしにひあまそてにる
ゑうめそんむと思ひしを
はくしもいそれるねる
ゑんりしのるにやるに作るそりおるて
ゑをなるとも柳てあまるんりる

と。ゑとら柳の玉するんんてとも
とりんちもまてふもとそとるれる
あるもんりくかるるる
らくえんりれわるあとんる
りらまこをとんるる
りるもてあいつねん
るれるのせれるれるを
えりのつまいるしみちるむるのるる
るやなりりいしをとるるるる
るるるるくさるて柳の花あるる
らいてゑるるるるるるるる

みさしあひくまこゆるとゆるとくつるちち
しせあいさこ車とらえてみるとゝ川を
かさうけうとゝかそこく
まるはけしけるとうてうく
ちうろむうまあしかもしまく思ひ
そこおれしこしかもしまく思ひ
はうこそこれ命いさけうあるけこと
とかこまてかこあうこ面ひつるものわし
はるもあるけよこいこうしかくこうこ
うけもあるこふまうあうれ

安元所賀氏記

義原法師

安元二年ゝのつくゝ初のえさるかやまひのは
ちの四月せはうとゝきまうれし島のうらうふ
乃ゝ見えいろわよゝをもはしまとやに
ゝ次ゝもゝ上はゝいちうみちはゆ
ゝしゝて秋ゝこの川変とゝまうを
ゆゝうゝうゝの月のあうゝ法住寺のみを
ものゝゝゆゝあうゝのゝゝゝまうゝ
ゝゝゝるゝゝのうゝ院の御所一町ゝと
ゝゝかゝにゝゝのゝゝとゝむみゝゝと西のう
ゝにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うつるそうち楽をうつ院別当高倉人頭
あうとゝ事れよりとゝ後中門より西行
うとよせて入侍右方鈴市と中門の内の
らうりよせてゆとくゝ出るをいりし
の時うり

基房 後宗 関白太政大臣 内大臣 師長 左大将

大納言六人 重盛 右大将 公保 隆季 実国

中納言七人 定房 実房 邦綱 兼雅 実綱 兼宗 資賢 教業使 時忠 別当 宗盛 左兵衛督 雅朝 資綱

二位中将

宰相八人

三位七人 成範 左大弁 安通 信隆 隆輔 頼盛 右三条 実家 左中将 教盛 実守 右中将 朝方 基通 右中将 基家 頼定 信範 俊経 左大弁 脩範

殿上人院人頭三〇ひ弼 中宮亮 右京大夫 ゆ 侍従 左中将 ゆ

のうるゆうとうくゝ出るをいりしてゝ
中つとうちのみるゝ出るのわうさうとうあり也食事
れうりきゝ所くゝの所人所りうんてん
のるつうのすゝ二同ゑんりのかうんてん四同ゑ
女房のゆうゝのうちうゝ所のうすゆうのうね
しうちさいつゝのひとゝかうきねうのうあうち
のゆうきゝのくゝとうるゝのりんとはくゝお
しのうらのみるゝ二同ゑんりしゆうに中宮の
ゆうゝのうちうゝうちうゝかうゝうねあうゝよゑのうち
ねゝうゝのうゝゝはうゝのうちうゝうち

京やゆつるの白いさらしてきの白いをくく
きらみずのあかい橋とひてつきつとつと
のゝみのらうよ上西つ院のうゝいくあり三位
うすやゝはうとのゝうゝ三ゝ如院上西門院
中宮の御ゝとくゝのゆゝしゝゝゝゝのゝ
さゝゝくの紙をつゝ孫さう南の御ゝい武者所
その敷ゝいゝゝかくやの西のさゝ院のみゝ
しんゝゝかゝゆゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝ行
のゝゝゝ者のゝれとゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

川・花人とてゐる女位花物をつとめて御よさ
てもいる女・花人とくるる五位殿上人よさつて侍従
ゐるとつるとかくるるとるるどのく
られとそくそく・御前のおもかげ・ひと
るひ・殿上人・侍従・内豎・蔵衛・別当・殿上人なる
らひあらそくそくしてのちものくるとる
たる所・院の別当とうて以右大弁書・
中つかとる・別当判・友代とむくして・御
のくるとるて・ものとるまうれるのくちと
ゆく中門のくいくねぬ行事のをてんあいん
まちとるは・ものくはむくそのくいの

上御しるく・中文大夫事をこるつれどんちは
のやうにおんくのつるに・院の殿上人
共物をちいくるとる・と御法外遊戯ち
してをひへらをぬ・御しる院のいるの御まへの
るのとるまちるる・張物・持大納言・すへや宰
相・内のいるのいる前のるるのたまつ者もるる
役供・位・後役・遠・友頭・四位・殿上・重衡
右馬頭・御房・右中将・時実・廿将・歌宗・権中・源宰・侍従
入御・殿位・殿上人・内・紫・未とるるるるのるる
るる行て・南のひるみ・西・才七のまんうちん
二枚とるくるのくよ御のつれるる人数

はくがくかみさの三〇とうこうこく院のゆ屋
とし。ゑんう西ゆ又天屋風。三てうとてく
新し。みすさまの西のみとと。あれて。岩
しきむうの外又ゆ。うちん二枚とくくの
上に東京のかしきの三〇とうこく。天皇
のゆ屋とゆ。はしの東のものゆ。茂の赤屋と
しきゆ。法歌まの屋とゆ。れなしらけしのは
しのものゆ赤屋とゆ。三つの屋とゆ。
赤迎。明家とゆ。ゆんとうはしのもと
に屋とくく。次う近衛つき明家よれた。
次う三位。御。関白はまの屋につく。次中

将三〇じ位又御と先次。大臣位下所まの屋
はく。関白。右大臣。右衛督。ゆ。法
歌とりとつきよりとと先。次う三位の屋
上人うのうの屋に。はく。中文大変屋とる
ちて青蛙のとよかう。行幸ゆはしの
て年人。楽人中門ゆ。ひん。礼紙の三変。
まつたつきに右次に右衛督。ゆ。
く。年人の紫宋。たあをゆ。わうく長とゆ
むう先のうちのうんむとうこくのしかうる。
すううのうんれはうま。むくさきゆんの
うんうの三つうやう三ついうのかうこちやくね。

みひらの宰相のもとにおはしまさるゝのちぬ
あるそうらのそんむ新のしさかまの山うちの
上のとゝねあそさんのもゝとゝ合のしゝ
さやうのかゝるのとしらのたくらんとゝろ
の元そうのとれとくうるたいゆのくのさくう
たゝ井くのやよ沢そてに堂王丞とゆきて
ゆきんの丞とわさるまいゝのはくうのわゝそ
源のまれゆゝ沢そゝ行きの宰相二人たま
ひにおそうゝ沢にわゝいましい若宗まに
きにたゝの年人ぬゆさくゝきゝ美ゝた年人
中ねゝそうの検死かるゝれそう。左衛門

さゝつの。さ人ゝそ。そうゝ。右年人ゝ中ねゝ
さ。ゆゝさゝそゝさゝゝ。きんゝゝつゝに楽人ゝ
鞨鼓。治ゝてあゝさゝの。沢ゝ三の鼓ゝ中納ゝ
ゝゝゝゝ。つゝさゝ四人中将検人捕ゝ
ゝねゝあゝ。刑ゝ中将ゝ捕ゝ。母後守も
ゝゝゝつゝに乗ゝ三人中将さゝゝ。
中将ゝ捕ゝ。右ゝ治検ゝ。右東宮。節人
人中将やゝゝゝ右東ゝもゝの。ゝ中将
ゝ人ゝ中ゝ検ゝゝゝ。ゝ沢ゝ。沢
右鼓。遠に守ゝ。ゝ。ゝ。鼓ゝ治ゝ。
ゝ仰ゝのぬゝ。ゝのゆゝましの師ゝの

きくとき、物をとりて一のつゝみわりとす
ゐひとさゝてゝ、そのくゝ此のうをを人う
まゆうくゝやへいとゝ、たゝたなのはるのきさ
ゝと、右ゝ左のほうの南ゝ、前山の一のまゝ
ゐ、一のつゝみくゝひらて、夜にゝまゝて紙式
ひろくゝ次ゝのゝ楽人年人、龍頭鷁首の
舟一のゝて、宴王題をゝ次ゝ、おう三ゝ式
ときさゝて、かくゝやのきしよりく、後名元
ゝつさとゝゝ、かくゝやのあゝさゆまゝよい
先しゝきゝゝれゝをてかゝみゝまのまんを、
かゝのゝのゝんとゝくゝらてんのはゝらよゝれ

あゝねのつゝはゝにゝゝゝのけゝるゝをゝん
ゐゝゝしゝわゝくゝたゝゐゝにまゝいゝゝ
次ゝたゝんゝいゝくゝゝを平示破一反陵王破二反、右此人、
小れのゝ一のゝとゝにて一のつゝゝゝゝゝまゝ
すくゝゝ、新名龍、おゝをかひゝをゝまゝかね
淀房、たの年人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゐゝて、桜のゝけサねゝれをを出くゝ前名
ゐゝあやゝまゝあをゐのゝくのゝをゝゝ
のくのくねゝゝくゝ形のゐゝゝゝゝ
くゝおゝゝゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
よくゝくゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

とうぬ年作りてかうの入道院のゆきとの
殿上人と申侍して先てうの年のゆき
てらに参りよりくこれもあるまじくこえ
つゝとて大阪の御ぬのこ殿ゆんうよりこれ
を丹のゆとうぬうて国の御使えさまと
そうに文の大将えをそうて参りて御元
とうて赤の四さうをて院とゆし事申
行の先いかく参なにうてうたうてひう
うみくくくくのくくいかの御ようお
ほえうんうつさよ殿上の楽人よりくとさま
ぬうつさをくくきる行事の宰相とうさ

ぬうぬうを年人丸丈のきぬを行侍うを
ようさうれまんさいくくのかてて三んまう
くうかくくついうるとゆゆまひとうぬき
くうかくをいくとゆゆさてぬうを同けくて
まひのゆ行事よりくはくくうをたの
かさくうをくくを西の中門くいうのうち明家
をうるの御馬十疋平文のうのうをうさて院よ
ゆくくまうくゆゆ殿上の御府とうちうを
うて近衛の舎人うるいうをうる九中将新宰相
通親九中ゆ非参中文元宣衛たゆゆ資宣
右ゆゆ清通新ゆゆ親信右ゆゆ時安たるゆの
うよ上うくうをけれ人くのうくきうゆ

ちゝとうちいとくさきさき花山のぬしと
よもかくやいあひしとゆえうち師すんとき
先ゝ心ゝほゝ心ゝたゝかわかう伝ていて。
のもゝなかうとそのくけてゝちまうに芳
つゝとゝとゆはさゝるゝくゝのゝゆうゆは
芳ゝ心ゝさんかゝさゝはゝ社ていゝく院の
みゝやゝさゝんゝうのゝちゝんゝの海とのく
ゝさうゝとゝ心ゝさいゝくゝゝゝやゝとゝうゝよゝくゝのま
ゝ次次ゝ芳伝の具ゝとゝて芳ゝさゝゝ豆笛ゝゝゝ九
ゝ心ゝうゝとゝ名ゝ和琴芳ゝ心ゝゝ琴ゝゝ和琴
ゝうゝうゝゝと敬上人ゝをゝてゝまうゝかゝとゝてよゝて

海あそひうちゝ海。関白山笛をゝとこの海とか
入て天皇ゝ芳ゝくゝまうゝか。右大臣亀寿琵琶四大
長所長筆中宮大夫琴ゝゝゝ大納ゝゝゝゝか
笛按察使ゝゝゝ維行ゝゝゝ物ゝ左衛督和琴ゝゝ
ゝうゝうゝゝ左中将和琴ゝゝゝ桐ゝゝ家琴ゝゝ
あるゝゝとゝとゝのゝくゝしゝうゝ賀殿のゝゝうゝゝ
に平ゝゝのゝのゝゝ方ゝい舞ゝうゝうゝゝゝゝ
乃ゝゝゝ。ゝゝゝ海笛ゝ音ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝくゝいゝゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝうゝうゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちさひとかさ。それ井のうちの泉をたち
一ぱ。ちさ。ぱ。ちさ二ぱ。左兵衛督教盛さ
ぱ。ちりうる。ちさふ。是ちさぱ。左兵衛督
の座り。ぱ。さく見参ぱみる。中つぱ。ちち
てみねとさ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
とさ。中つて。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
いちくよ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
にちくと。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
のぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
入御。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
かくてあれとぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。

ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
くくさんとて。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
まちちつまれて。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
ぬをとさ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
てつちやうねとぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
らぬ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
ちちくぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
きのまねて。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。
のちいとそして。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱ。

おとれさひ人をとれをくるをき或
をわしこうきうきんかのちとやをきのうこと
てゆをとてきらくしわうらあをかをちら
それをみのきねてきれるをくそれうけうち
のゆひこれまをれをもしわかきうをくらわ
ををくやをくねさねをうこ関白殿外戸人
四条のうをとをうをきあうをまをあとう
ちをさくの花とつをうをいこうをうしれ
てゆらとつを秋をすくのうちをくをと
つをそをうをひうをうにあをあるをを
をくて公ををくををををいをあをれ

をわをつてゆて中宮女院女房の方のをひ
人かをのゆうをのをすをの女房の舟うう
乃他のうを人をゆわうをを中宮御方の女
房の舟内のうを人ををををををををを
をををををををををををををの舟ををを
ををををををををををををををををを
のを縫物ををををををををををををを
ををををををををををををををををを
兼実内大臣師長右大臣
ををををををををををををををををを
ををををををををををををををををを

定重衡・左中将頼実・侍従亮・サねこれ等・左の
将監・ゆき・侍従資賢・ふじわら・やす
とうらの人々と云て・女房達の車
ての中に・殿上人・ひとつ・ひとつ
に・殿上の・つぼ・ゆき
車毎の・花人・とも・花・ゆき
て・管絃の具・流の御・ことこと乃
を・国々・先・ふれて・御車のまへ・ふ
車・内の・ゆき・はつ・中・あ・みを
のうちに・ひ・ひのうと・ふ
くを・先・ふ・ゆき・ふ・ゆ・ゆ・ゆ

将ゝ又ゆゝしき人ゝのとて
けるゝ人ゝ おちのこるゝ人ゝ
あまたゝ人とうるゝ ゆゝしかりしつはものゝ
つゝの事ゝ ゝ ゝ
のゝ 波のうゝ ゝ
くゝは まやに まん
ものゝ人ゝ ゝ
みゝ ゝ
行ゝ ゝ
しゝて ゝ 人 庭中 勢
まいる 頭中将 実宗 中文 亮 重 行中将

きゝ ゝ 右大弁 ちゝ 新 中将 ゝ 行 光
かゝ ゝ 新 ゝ 清 行 右 ゝ 将 ゝ 房 行 ゝ
まゝ ゝ 右中将 ゝ 右中弁 親宗 行 年
御房 越前守 通 ゝ 長 京 ゝ 人ゝ 十文人
この ゝ 刑 ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ 人 伊 ゝ ゝ ゝ ゝ
て ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 殿上
人ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 四方と
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

ぬをあつとあゆきてゆけらさきさきしもう
ちやこのくのそれのうさはいとまつかねと
あれかしと日よかくへうるうしねて院の
ゆうしに後上人をもてやはそうきとこと人
くこのうかるさと当るうるうしられて
ちつきをちつ中よりもこのうわ中ねを宗中を花
宣衡どもにそれゆよりうるかわき人
してえさてをうひかくいて保ふか
うちどもあうひとくいてのちにはもものの
うちうるのくよきこつるうるの青ともい
なうゆしとこゆゆてあつるくとどえん

てんの南のむうよりて師あうひうう花
人以中ををやどよひをもうるうきた
とうる行くうちみさ行てあうくんとて関人
長とにさうをうちうるて中行又
かくもうもつる○のはあとひよともきこ
ちつくさうさうて行ていうもて
春庭楽をうをきといしとの破青馬ち
のうう平綱を更うれゆう慶雪宗ゆは
ちうをうを所くのきくおさしいうの
ちさ月ゆれなとのようのゆをいむうれ
きうのうくおうんのくをといんをもち

あしたとうのうちひとかつをとくはちす
ひとてぬきとくんくまわいくね
六日きゝ長く撥蕎うちとてうのつやちく花
人ちんてんのはさうとちくとちとむ女院のは
かつのうちいくかつきねうりきりえさあと
ひくこいろくのはしてはゆくもんのまろ式
ねをちすすちうひくうものうくこれ丹
ひくものうちまねまちひくきねこれ丹の
きちこの女くとのくくちもんの色として
ひてつきさ日中夜のはかつのうちおえ
先ちかむちまねよつさの花としちし

夜つきさ日とれさちひのちうのちえ
きのくちきこれ丹ちひうちきねこゆま
ちうちうちひのきねあちきみちひのちくみ
ち人ちとむちひてつきさ上西つ院のはか
ねのうちむ中ちはくくてむちものはうち
くくまちうつこねに年人未人宮勝光院のつ
日夜ちあはまちはう事の寧お教きちひ
ちねいとさちのおいちうちちくくちて
かくやへまちち地下のまい人未人ちくちれ
はくちてちくちち龍臣鶴前の母古ま
はちのちまちきちち殿上の母二ちち

迦葉のもとにゆきて、地下のもろ
もろの母二殿に、迦葉府のものと母とと
とかうのもろもろの母二殿らかうもとと母
とともに、東の門より迦葉司明府に入る。
法皇寢殿の南のひさしの御
所にて、法親王を召出されて、
座の西より東へ向はせ給ふ。大臣殿
もろもろの公卿、殿上に伺候
のち、御中ねさせ給ふ。国司をはじめ、
寄衆中ねさせ給ふ。院の御所より、
法親王をとりまいらせ給ふ。

くるまよりくまでひのこしらのあるさく
人とのくるまよりおりて、やくしたれば、
殿上地下同者ども、警衛の武士ども
を中より四方向へ、ふるいつ殿上の母の
うち、花山太とく、殿のひとの中より此道よ
母のうちのうへ、たの太殿のゆを
ものうち、殿上ねる惟盛、たの太殿のゆを
ものうち、大臣殿のうち
とうくるまをつけ、おりて
中門の廊のしりへ、ものとうくるまを
何とさせたまふ。

奥とう次国に所帯と大守よりさくもつる
石大将重要説絶筆とし
ら海中細そうもひまは筆をしゝ海をく
ひうへは楽よりあうせく大守は帯とはいる
よせをつうのしゝ思うのよはをしはいまも
生へうう仁平の所実ゝこの事をし
席和のしてそかくちあうまれをあは
きくくひあうまうくてしゝかく人毎よ
ヲゆうて手ハくいる反上の毎とは事の
きしよつてかうのうゝの毎をしはのく
ようにしくゝ人来やへ

也次第さんのうゝ一のはうのわうをうを二人
毎よをうまして紳と知るくをたちのもし
はうゝ人はのうをうこはのうちうを物
をうをあうてこの同ゝ人をを太この
まくよをうまるへをれゝ一のつうのまうを
ゆうしをれはかゝて入をかゝてをのく
をよつをとうて年のをくをうをを
検地遠役遠州（成）ゝをうの中はをいを人と
うをうをいのくゝる事いくをうをはう
をもをうきはゝやをゝをれはいを人をを
はうをのへのはをてをうをを人をゝ内

如之ゆるさねとそのうへにすてしの後左右さしひとしひとさ法花寺
寄物 序一通訊詔二通入道三通右兵衛督一通 遊船のとゆくあるさ
宮内兵部人右少弁さつまけとうく内大臣
中文大夫隆季 右兵衛督実国 右馬頭資賢
くやつりつさよしとはなかものこ
山色とまはんさたあるさまさ
新さうどのあるさまさ
馬藤とけあるふさまはさふわのをせす
あるおいせうひをまは榜のくひそのこ
丁美濃物あるちうきのけなの

きひとさうおもはよりてゆ給へしまの
とれはさまはよ御前のものとまつさ法眼
大納言さまゆさ役供寄わたのちは大長中文
大夫隆季 藤大納言実国 桜宮資賢うや
ゆくつのゆくに源大納言源中納言
ゆくつさとあるいはくよりてけ又内大
臣 後大納言胡床けきさゆくとはくく
ちみさいさゆく又さうしてあて右大将
と青海波の紫手のあるはよ一あのくく
左生つ 右宮内卿 左中将 加賀 中文 兵部卿
行元 少将 惟盛 左少将 資盛 新少将 清経

元亨はじめ越前守通貫とりあつかひてゝ
やがてしりぞけられぬ其いきさかひ人はしらず
又義人管領の具とかくやうにそゆゑ世大
内方とをさまるくらゐ武蔵守義正乃
人四十余人よりの中つゝしみとりて
あるべきやの心ばへしるべきなり
かゝりしの世をうらみ世のさまを
くらゐなどの世をのてしてとつぎよりえ
ぬしもあるとかいふやうにかゝるものら
を敵のうちたのさまをつぼ

つぼんさらのさらに二人ばかりの新かねさん
ねつぎは石の弟人四人づゝは人さいの下
らに一人ぐうんとをもとゝいはゝさしてあるし
かまひ人のうちをされよりてよりてはいをを
とぼんさらくれはゆゝいまをるをかし
ろいからにさらくりるく決し長上人と
のくをおくつるうちをはをを火をたた
石弟人いををはくををつるものくをををち
てのちに人うしにこれとつるるをのくちよ
利とををの明れ新かねきしるあくはぬ
ぬこのはくく人物をくあるとををを移ふ中物を

ちもとさ。枝中ねもと。葉さきまでがくやとも
いとこらしたはくくるねもとさきのあり
さねどまたこうそにいやまさる。ゑんさい
そそぎいらくかくてまつどれもとも。
ちもしのまくに。枝先少ねこの紅をさかり
ものどんしたるこうえんちの水の
えんのもと。桜のりえさのもの。山ゆきのト
かまの。やまる井そもそもくいしりそく。山ゑ
ほうちさのの日のもの。師さんの亟のもれこ
ともに白くゐ代よりまるはうしゐ。花のね
雪ゑんしりさとてちまもはと。ゆのさ

いとこもくやさ。ゑれよ。まゆはのもれや
る年せるかさ。惟盛の朝臣の兄ゆき。
紅ゆるり世のまちく八月のりはもてや
さきさちおるゆ。さちく月一年さ
とる紅ねさまるを内院と拾ちいそ
くゑくさせもの。文ねこれいもり紅
ちこ次。そ一のちひゆ。ゆはゆ。ゆ
ちは源氏の次の中ねはりさるまれ中
くよくかさちもしゆえけゆて。
まひとてでのもれつりてゆ
くやくゆ。ちくくゆ人ちの年人いちく

いらぬ御ぐてへ御ほうあ年人ゆねをうさ。
百敷のまへとやとやくとやとて中ねや
そうらはいとく御ぐてうちをるまうさ
りやいくこの所は御しる報とあをれせ
いらくとつる所のたことよのつねてあくな
まをすおくあをきはまをうさ秘伝うう。
ゆくくあをうは所あくるまへさまの
仁平の御賀こう中の院のちんれうこ
ちのちゆをそうとよりいあらせくあるさ
をうとこのさいもゆくくあををあを
まて院のゆさより御ぐてうちへさ

御ぐてうさのやうひわうをれしをうをて。
くゆをうをうすいをうくあをくやうるは
ちくくこれをちをうるをうまをあを
よ御ぐてうちうと伝侍従有盛ひとを
まの所は院の御ぐてうちをあたして称さ
ゆゆをとりこのをうの所のうちさをのく御の
をうをうをくへちやををうるものちく
く御をとる御ぐてうを海はをうと見をあを
しをうをうは御ぐてうさてをまを御飲酒庭二遍
たのたとをこのありひまはをのみるこを
つくの所をのまひいをるくうをみるもの

うのさと中院殿年とをいるの時院廳にて
をとりかやをうのうちの中将
ゑいより光をとりて右のさう
うもくいりあやとつさよ陳王の
まひまいうの廣つ橋ゆきの長右
くとうてあまのまつのうつきうら
々さん明快河のわくれくうとよ
ゆいうちやうとうとあやうしと
のあとさ夕月のうとうとうとこと
くよ花のうちうきわとくとこと
きちうくと云ふ光とくく返てうそ
ちくくとうとみさうか

ものとくく清さよたてん 破一通 急三通
右ゑんう右こくいうふんまひとあ
おううれきうとあ破ハ
宰人九人をれ馬を引んこあうう清うの
よこうまれつこふれあとあう沸笛左衛
鞨鼓門大長筆乃こと光のうう
中納言ものいを光よちんあんうちけ
ものこ笙宰相いをこうう引ちつとう中ねこと
ようつをうう毎まうこうれをうかう
てうこあるこうこうをとりのくこ海さう賀殿
急員刀自世よ光つうこくこつひとを

よてとて拾ひ集めて、ふるものを、
百さいらくさいらくをもくらんまつりいろ御あ
そひのくくつくり、左大臣殿殿
てごきんてんの事ゝ御ゆりのを
さるふ御手水指左大納言殿御ゆえ
をもふ殿さるふ殿ふ新ん和の
きのこゝをは前よりきまつりて乃ち、
ゆゝしのきれらふ、ゝゝ林もなら
ゝきこゝまきこゝもゝゝつ御くゝ御馬十疋を
動くくをもかゝきちきぬゝゝこの函
つる舞人九人ゝゝひよ中ゆゝらゝられ成

動く院の御所ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝてのち西の中
つのゝゝゝ左右のむゝゝゝゝゝ
ゝゝゝて中文の御ゝのをゝゝの
ゝゝゝゝゝゝゝ右大臣ゝ今ゝゝゝ
をゝゝ右大臣ゝゝゝゝゝゝて
舞人大進ゝゝゝゝゝゝ文院別当中
文左文隆季をゝゝゝゝ八條入道殿
をゝゝゝのゝゝ院宮をゝゝゝゝゝ文の
御賀ゝ一家のゝ上達部殿上人行事ゝ
つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ胡

百の御ものとゆるされしかども
ゆゑなくして仮よりたるもののほとを入
ものとなる後世をしてと物ようきな
ものとうて作とも師匠のあるべきなり
ものとうて作とも師匠なのなきを入師又
院のゆるしあるべき中御をはつうし
してこのこひ師匠なのをとうをを
をなるをうたうをうをとこと
なくあるとよりうしひをうをを
をものをうて作をうをはをうをうをを

をとなりなるを後世をしてと寝反のみをを
のをうをよりををの師匠年人未人をを
はをうをうをうをのをはををうををを
をのをはをはをはをはをはをはをはを
ををとををををををををををををを
いををををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを
ををををををををををををををを

艶詞

同

わらそ風ぐ月とをちむしろにつ
てゆきまたなるふしもあぬ分乃人し
きぬ高花よさへおなしいろぬるとき
こしかすまへあるうゑ風うとういわも
乃うくさんつ心しつあるいそつ出れ
ちらやもり神の出代ちとんれ風ひ
していりとと五人こそえとをきし
やれちとこのくぶもせとあ乃ちさね
うこはうそへちはりきうふしされとて
ゐしれうとれ行ういちと之ちとおちさ
さうみう風のちるい神しの浦ちと

主ちうかしそさしこうてうしんて
はちとるわ乃もまたしるうそりまつ
つとといつとだちを年の中ぬい我分むし
りてもの分りまてしてとうこうゆれ
主乃うんい変へしいち人ちくうんと
ううみそうう人とつ乃ちをいるねうと
いせつこ乃なちとよんてちうと由
こまちうやいるうこんれしうつ
人ふもかるたいあるたうこせい
えんとうもねいふしうちうまて
ようこぬやりひつとそくとうはまこ

ありかさてはいてとてもわいてとも
すうへし
人しをとうれかかしもうせひくさ
せんしうちかをそねまれうる
ゆをふし神へかしくうちうくまこれ生物
人るそうしは海のうるを
ゆうさたたうちう又月日乃枚はまれも
いやうれふとうちこうたくうれうて
うのいしそをかしと神よ波乃くを
うちうちうのはしはうとてわうし
うの枚代あるをはいしひとう

うるさは
さのまてうう神よをうをを
あうれはさくうるる
やはあうさうはうてあうれ
風うはうしうをはけうり
うていそれうを
うやうをわうは田代あうを
うのひまうしうをうを
ひうはうをうはうあうを
うをれうくうをゆくいうれも
はうしうをうをしおひうをい

いとこうんとが行ゆるをうしきよ
いそがくしうるとんりわくさえ
関ふしあるいうかうる四し
あんまゆそうしいしうるめこと系
のひさしるれしやんうれ事
えをいしるをせんうれいさ
文野のすうさうのむやうにて
すうあうくいうこいひるれも
そうしゆくたうとうかるれ
心せひやうくなくて
あくもよわうりゆあとせて

さのうやんのうれかたう
ゆるうらうしれこしいやうのそう
おうくをくはりんさい毒
あうんうしてうんれうれゆ
うたうさいうむうとあをんうう
てけうたうもしう日ふしうとうふ
はゆくもうきくうらしていとそ毒
くしうたうんいうわゆをれゆる
しにうよいゆれんはあさ四さ
四しゆうんれうつうれし
あうもうをうきのんれを

かるく月日しるくゐまきよぶんとうて
さしてゐいかよわもとめる無きる
おのれらちのをとこちるた
なしいのわもちよたるくロとこじは。
わつまとやきこんてるしふしこちる
とんりてたとうねこすふりしいると
うれしくく
たのしくいこちとかと
そのちこれわとうれき
見るまてゐるれもを行をいをこるれねし
そちんるあのせけなるゆさた

けちのせまそて秋ふるるれ
心るそそとすく半いなれしとのた
うちなくさむこしわるをるれ世れけし
そのちまと又四ちまんとちぬとりは。
こゆくよせひつまきられゆくていそ
せあしるうんと若えて
ちこせいぬと丹のこるれや
ひしるをくはこむき
ひとちなすごちそれ人のちゆる
うひつやちわく
いたとなれそんばけくこやど

このもしの物がたり
いはとなれるうつ
せみのから
あらはれぬ
いつもの中をの
ぶるものがたりしたん
ぶしてうく立てきまりよりうさてだにの
事やしとさるなれし
ふるさとのあら壁のこいをふ
かるねあり
ちりくあるとてをけ
ちりをたつる四ちりにうつ
きいふしてあいうんとうてなりて

うちかしらくまにいとるきてうす
まちてりうちらいくる
たねりたてのをやひらるこ
うちうてのこいき
人あまくなる中ちをにはら
うれしくあるやうてんとおりい
こなし
はくこうよふいそれとう
あやしとうんのやそうん
をはくちりうなひるつくをる
やいしあんのさそうしんあやこ

やうくんとまりたくて
ちかるるこゝもまぼろし袖のうらなみと
うさねくきりくゝ人なとゝ見せ
つくゝくわりもりくゝわたりなるう
しく物ゝうもうすほのしのいろ
ゝゝ見やおもゝ見えんすりとゝ
よさゝゝゝつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
せそうしゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝいろ孫ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ちゝゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
四月ゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

うもてこぶいけうまとんうりて
ちりもあいりてこそ
そしたのくていうそうりきんくて
ようなおうちるようきくしこうり
ぬうくふうてさいくちしたくて
ばいるいうる風ちちにうん
れしたのくのうもれしのを
くてたのくしなはうきこゆうるし
ふのうれたうくしてあんとつしも
いはいそえうんきうれし
いふうんうはひうれかいちも

しそいうこやのうたしなうん
いまんあうはたかうはきれいたの
そしいうとうしそこ四ふうくうる
うつあうくしなうくうくう四次
祇ちうそうえそしいもえちこ
そえんあうこうちはいくるか
かうくうこさ本こちはるいあやいうや
ちうそうるのうううてそあれうい
しん

なうけなうこ人のうちはうるて
うくういうまかはうむへき

あるうらとなきくとあるまとゝやすいろん。
さらい月は一そひとしろしたるこゝろん
とそのうもむるくてとしたゆあい
そのめうそのつきなりたるこゝろ
うそそえわるうるとのあて
うちやもむうもるくもちまし月とうる色し
さるがく当物やしいとうんらやんてゐるさ
あらうされさ
いつさてせぬ月れうしたらちそんて
いとく物代たもとうるれ
かく仏物やしゐ月とゐ代金うもたうる

しがしうるぬ月ケもとうひつうれた。
ゐうんて和まれの心月とんもとたゝ
やりいれらしおしうるすしるれも。
くうしゐ見そやうんとするうすうり
やそうしれし
いゐさうにやくしるふうやしうん
はゐいやりひりもあるれし
かうくかさううしるの心のやいうる
りまふりひつきうれくまうるくる
うひしれいれしとうゐ月しあうねまし
ひうとうあうれし廿日あまり代月。

くもなくうへのそらはあをてしなくこ
くうしなりしもえたるとそうしも
人しなきまにいはくるあるとこたきそ
ゆるふはをさやるうなくがれるうゆ
ぬるるれいしいしき人のりまとうん
と侍るを

秋たちしあらい月やしまに
うゆれいそうわくもるなれも
ちりうちりしをばうくこいしこ心中い
人これをこいのうとみとうわれを
うゆすうくこれを侍るを

ちうこうれいうこれをこうをうの
うをつまそしこいうん人れうのゆ
をしうしうく

ちうをうこうをうをうかうをうを
れうしんうはゆうをうをうれ
ちううをうをうをしてをふうを水
のううはをうを
きうんこいてをうをうをうの
ゆくうをうをうをうをうを
をうれをとうをれうをうをうを
をうをうも

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こゝろ武さいいけるよりやとしいとおもふれて
そのこれいはくくとるもらしと
まことさいしいことのくさのちと
せつよいとおもくるほどおいちしてい
りこゝろつしこゝろしこゝてこゝろにて
うもそれこんしこゝろわまはこれはこゝあし
とおもふして
うもこゝろつくまやしこゝろうこゝ
いいこんこゝはこゝやいこく
又その不よりてつはうくこゝしつ〇ちり
ものくるうくてこゝはこゝ神代はこゝ

くてこゝよこれいこゝくこゝはこゝこゝて
こゝうこゝこゝいこゝはこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝて神よこゝるこゝこゝこゝこゝ
しこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝくこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
神よこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
こゝこゝこゝこゝ世こゝ
こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
せつこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
いこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ
あもこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

さてそのあそびのいとんをし
てもてそのいとれくてゐる
らしうしがりけるもしへるなりみし
ふるくくんをるして
まりそあてれやそふそりを
すそこい神は月に四そりり
神はしをのはあれしやりえんをへ
りそよゆさりいそりしりしもあまりれ
しさのあもりよりをさいそして日しりの
半しうしてりるしいれぬ祝よ長しぬる
よるりしうおりけりもへくを四なくそりの

四る新でいとまるけよりうするろ
いりいうるんせよそしそしるんとふるそて
ゐをさうよ我ようえる月るれを
ゐをりるをるりたりもへを
あもりるりまにしけよあさ
ましまそりけりしるのいくを
えんとを四くるいりくてをんもるる
ありを四いまをんをぬ祝いをりまり
ををそを我るりあるを四くて
をりをへをりをりをりをりをりを
をりまをりをりをりをりをりを

あるれこのまきをうひとりてとやとて
月
ゆきまよふらんかはきとすゆ
あすちの物はなとそもるる
さふいまのちひまるひとりるとは
ちりすくしてそちへちまとそすくく
なりしかさはあまて人をのまりてはち
るれいはるくるなちれ花きちれ
四ちいつそるさのことをのくるまく
人をとるくすきゆくちすちちの
すちしい

まちやいちりれなれつん
いちいこしい一ちとちりう
ゆるあるのしいけとまちへしも
ちりい中くちるはるをれれい
こしいちのちのすくさ先よ
きさしいい物をるるさ
あちちあるのきまて花ゆをいちち
けんちやしのちそちちりそれいをれ
わちねゆゆいすくちれされい
そちりはくくちるそちふるそを
ゆきちるちちそれ家

むさしくせよわるまいさまのばんれい
ひしゝまのとんれうくて
ひらのせんばあまとこさんうつるは
ちるんいわらしたなわるかしまん
それちまこひまるくておいうくしねを
れいやんうなるやうしてそのあんよあく
ゆうてこさいうなるぬうこいうよ立くれを
ひくこそばるじれいのされたのかをうるば
いぬはくよそくとしのこのこれ事
ケれこんいう神よあなこ用くそ
かくてあるくそくとんこいまいひまし

わうまこさようひるらくてくとんいぬこ
くよんわれちをこさいこくるれしまく
るこじしりれぬるけくくもるうこを
うんくくて
ちうもようちはかんあくうれの
さくくひまるこすまるうも
ひるそくをまねるくくねくくさくうう
くたくちくくくくを
いくをへわるものゆんれんを
うくしくれあうちいはく
くをくすれ月くをんれいこやも

とそこ書わ
うひこひるゆきに月りはうそつれし
こうしもしやくうそれりよけり式
年しへつとわをいらしてうしすそ者と
こうしこうへつとうするすれい
あうしきうそうまうこうしわ
しそうすりのとせしん
うひこそそわくすくあらうさるそは
いそうくうゆうせれそうそうか
むうはれそるいうろりう
物へまりうそせつうそれむ祈うう

さうたそどうそうそうしうそうんそこ
りうそ
かのうりへせいいうりうるせ
しうすさゆくといそうきうえ
うくるるけなうゆくうわ者みてそわく
ろ色い
なうわこうしいくくしないねの
者うしきうんうるさをるうん
くせへきうや・このそいいうへまうそそ色
れは
祈りる和代者ようろ代ううそは

さしつくしてしられぬ間に
うす月つきれいやうくとすぐる事もわ
とせりへとものふるとの物くたくなれいる
しるべ
こもれいの身よそのもうせもうけ代
いうりしえふせいとるれ称
ある所そんのもとりうるれ
ものるれぬんるふるとぼくく
せんしだるすもるもんそれいそなり
とつとしいとあれそうしとたまも
られい

一とりるおるしたれたるもり
このるるるの祇ものとる
物代へそ物つひそれたしするり
つきそしうもるきものうもひくて
ものたわせれきれた
ものるるるる間やい
たふのもいるやる入ものるやうたるぬ
もひるはもそしおれ事たくの
るはもらいとせんいるまもるの間し
とせてそさしるるくるれ
しるる事はるまる

四ゐ神はかりこそ出てくらにけ
いうりそらしまのまたちうん
そしらぬるこけたちこまい成すこうん
人よいとらをはしわらしとなして
たちしく成うんはしらわ年
あられうしよりきねも
地こゐ年したくづいはさうまう。
くてとこんはるゐしやきか
さんこうぶるすさいてうすわら
四しまよるわこうんといむしてこい
そこれまりさてわいうやんや

うしむまよいりれし
たんこねこれたる純はれよりう
せいつこゐすえのまりやす
これふしこれまりんやこう
中よも義乃屋こうしよりきよしおさ
四しるうゐしわかしと月たこれ
きこいてせるうてこるこれたち
よ四しいううしせいそこれく
か行くるしゐしよこううき
かばひうたうゐしこん
いうすまよりてめけうあいてしをと

ふたとおいやしとなれるおやしさわう
ひきとらくて
ちまれるうとなわしてうたに
いというさにとやわたくれわ
うりたさひとわらいんとてひし
はしりやしまるさてとれうと
とうはうむまとふわらいんを
そのりしはんうさてしさ
ふうしそのうんいのとうをうし
ふいとれうとうはいむりいわとたて
人それわいとうけしはうん

くやいやそれ神のうさま
うりたくして山とんはうしとうう
うをおうしてうしうたん
そはつさいとわたにうわ
さしてうよわしすうも
戒うりいわやうんとわうと為て
つうすりわうやうしうを
ぬしのそうしうわうて
神の為うまうてんそうそうう
ふしわうしばまやいてうれくにる
ましうしん神のはうにうとに

きしやくしらひしらてい給ふりうしゃい
ちもてまさ神いうもんそうにうる
んうしつのうそをかくうん
いまはとうとふしんをしてあさ
きしらば
てきまれあうしてうるをうんをようう
さしわ四きやのしたにたりも
四りやうふこのうちのめ世れ
やりとうんとうしひたにあさき成
さしたいきんうるをはりかし史
なのせはしたあれしねうん

りせはしたいしわりうんさたりそ
うしとまりんうるへうとせれし成分はうし
うんうるねし
ゆくしたはえしふりうしねうるし
せるりうんん成分るねし
あるりうしれかるけとすそしんはうり
ようてなして
かしりうれうこうしはくさせ
りうしまりうりいん
てりしいそりうくうしはりて
しりいりやうくりうしそりう

そうしてはけてしまうとやうしこひ
そうしかの
うつつよりおもひこんうつつのしも
なほうれしかりけるうんん
うつつよりもうつつにてうつつとうすこそ
とこたきうすい中くいすいとうつつ中へ
ありしやうしんしなりて
うれしさにゆくえしらぬきうすれ
なほいうつつにしらぬうつつ
なほまうしうつつにしらぬまし
中もうつつ者にて

それしきこれせの中にゆり升ん
れいうつつよりうつつにそうしめ
ありしこの中代はまてんうつうん中の
あてうつつなくて
ひしうしうれんそ四よりうつつ
うつつなほうつつのはまうつつまれ
そうしまれ　うつつにうつつ　まうつまれ
ゆうつつ　四月　月ケのの　のうつつに
代はうつつ　うつつゆく中　なうれと　かうつつ
うつつ　うつつ　うつつ　人うれな　うつつに
うつつ　うつつ　うつつ　うつつ　うつつる

ひとこと　みとをかる　ちらして　やそうれて
あまつぬい　神の中　ものに　ものに　ものに
ほくくと　ものしりん　ものに　ものに　ものに
ものに　ものに　ものに　ものに　ものに
ものに　ものに　ものに　ものに　ものに
ものに　ものに　ものに　ものに　ものに
ものに　ものに　ものに　ものに　ものに
ものに　ものに　ものに　ものに　ものに
ものに　ものに　ものに　ものに　ものに
ものに　ものに　ものに　ものに　ものに

四いきて　あるとも　あすとも　ひまりあて
ものくに　ものに　ものに　ものに　ものに
ものに　ものに　ものに　ものに　ものに
ものに　ものに　ものに　ものに　ものに
ものに　ものに　ものに　ものに　ものに
ものに　ものに　ものに　ものに　ものに
ものに　ものに　ものに　ものに　ものに
ものに　ものに　ものに　ものに　ものに
ものに　ものに　ものに　ものに　ものに
ものに　ものに　ものに　ものに　ものに

内閣文庫
昌平坂学問所

扶桑拾葉集巻第九

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan